エコマークアワード 2018
受賞団体・評価コメント

SPECIAL PRIZE
審査員特別賞

株式会社ファイン
「グリーンステーション」によるエコマーク普及促進の取り組み

株式会社ファインは、2001年から継続してエコマーク認定商品のみを掲載した商品カタログ「グリーンステーション」を展開。冊子、ウェブ、電子カタログと、利用者のニーズに合わせた媒体での情報提供を継続している。冊子カタログは公的機関を中心に毎年無償配布され、電子カタログでは発注仕様書を出力するサービスを提供して調達時の作業の効率化に活用されている。こうした企業努力による継続した取り組みは、エコマークの普及とグリーン購入の促進に常に刺激を与え続け、環境配慮型製品の市場拡大に大きく貢献している。

ECO OF THE YEAR
エコ・オブ・ザ・イヤー

モスバーガー
[認定番号：17 505 002]
株式会社モスフードサービス

株式会社モスフードサービスは、日本を代表するハンバーガーチェーンである「モスバーガー」を運営している。エコマーク「飲食店」基準で最初に認定を取得したお店の１つであり、認定基準への適合ポイントを多く獲得している点と、チェーン店舗すべて（1300店舗超）で認定を取得している点が高い評価を得た。直営店に比べ、環境への取り組みが浸透しづらいフランチャイズ店においても、マニュアルやガイドラインなどの運用によって一貫した導入に成功しており、企業全体での環境への意識と取り組みが高レベルで実現されている。可能な限り農薬や化学肥料に頼らず栽培された「モスの生野菜」の全店導入、店舗スタッフが収穫体験を行った野菜の提供、店舗でのグリーンカーテンコンテストの実施など、お客さまを巻き込んだ同社独自の環境貢献活動は、飲食業界において傑出したレベルにある。

[認定番号：17 505 002]

エコマークアワード賞状

エコマークアワード
受賞ロゴ

「エコマークアワード」トロフィデザインについて

蛍光管の再生ガラスで作られたリングによって「人々の叡智による循環」というテーマを表現。
受賞された企業や団体、そして全ての関係者が、より積極的な活動を続けるためのシンボルになることを願ってデザインされています。

賞状・トロフィデザイン：GKグラフィックス　木村雅彦氏

エコマークアワードトロフィ

エコマークアワード 2018 ウェブサイト：
https://www.ecomark.jp/award/2018

公益財団法人日本環境協会 エコマーク事務局
〒103−0002 東京都中央区日本橋馬喰町1−4−16 馬喰町第一ビル9階
Tel: 03−5643−6255　Email: info@ecomark.jp

ECO MARK AWARD 2018
エコマークアワード 2018

エコマークアワードは、公益財団法人日本環境協会が2010年度に創設した表彰制度です。
環境配慮商品の普及に関する優れた事例を広く公表するとともに、エコマーク商品のより一層の普及拡大を通じて、持続可能な社会の実現に寄与することを目的としています。

2019年1月12日

JAPAN ENVIRONMENT ASSOCIATION
公益財団法人日本環境協会

「エコマークアワード2018」選考委員長 講評

第９回目となる今回は、最優秀賞１団体、優秀賞３団体、審査員特別賞１団体、そしてエコ・オブ・ザ・イヤーに１団体が選ばれました。

今回は、お酒・調味料、電子機器、印刷インキ、住宅、飲食店、商品カタログ出版という、これまでにないバリエーションに富んだ業種の皆様が受賞をされています。それぞれの企業が、業界における環境のリーディングカンパニーといってよいほどの充実ぶりです。各社の取り組みからは、環境配慮を第一に考えたものづくりや、それを実現するための技術開発の苦労話など、心に響くストーリー性が感じられます。消費者との接点である飲食チェーン全体における環境マーケティングの実践も印象的でした。消費者や地域住民が楽しく参加できる環境活動といった、「パートナーシップで取り組む」持続可能な社会に向けた活動も高く評価したいと思います。

高いレベルでの環境を配慮したものづくりや、消費者とともに行う環境活動など、各社の素晴らしい取り組みがエコマークアワードの受賞をきっかけにさらに広がることを期待しています。

筑波大学大学院 ビジネス科学研究科
教授 **西尾チヅル** 氏

「エコマークアワード2018」選考委員のご紹介

伊坪　徳宏　東京都市大学 環境学部 教授
西尾チヅル　筑波大学大学院 ビジネス科学研究科 教授
西村　治彦　環境省 大臣官房 環境経済課長
藤井　実　国立環境研究所 社会環境システム研究センター 環境社会イノベーション研究室 室長
山口　庸子　共立女子短期大学 生活科学科 教授
山崎　和雄　日本環境ジャーナリストの会 理事
坂本　清隆　公益財団法人日本環境協会 エコマーク事業部長

表彰部門

最優秀賞

概　要	優秀賞を受賞した企業、団体の中から最も優れた取り組みを表彰
選考方法	各部門の優秀賞を決定後、「エコマークアワード選考委員会」が選考

優秀賞

概　要	エコマークを通じて「消費者の環境を意識した商品選択、企業の環境改善努力による、持続可能な社会の形成」に大きく寄与する取り組みをした企業・団体等を表彰
対　象	エコマーク商品の普及に貢献している企業、団体など（エコマーク認定商品保有企業に限りません。）
募集期間	2018年6月1日（金）～7月31日（火）
選考方法	応募または推薦のあった団体の中から、「エコマークアワード選考委員会」が選考 1）一次審査　エントリーシート（団体PR文（800字以内））による書類審査 2）本 審 査　一次審査通過団体に対して最終審査を行い、受賞者を決定
評価ポイント	● エコマークを通じた以下の「活動テーマ（6項目）」のいずれか（1項目以上）における取り組みが、特に秀でた企業・団体を表彰。 「活動テーマ」　1. 認知度向上、市場への普及・浸透　4. 技術開発における創意工夫 2. 環境コミュニケーション　5. 新たな社会システムの提示、構築 3. 環境負荷低減効果　6. 地域に根差した環境貢献活動 ● 評価の指標 「市場、社会へのインパクト」、「活動の意欲・継続性」、「多様な主体との連携」、「取り組みの先進性」に照らして評価します。

エコ・オブ・ザ・イヤー

概　要	特に環境性能や先進性、エコフレンドリーデザインなどに優れた商品を表彰
対　象	2017年度、2018年度に認定されたエコマーク認定商品　※公募なし
選考方法	対象となるエコマーク商品から評価ポイントおよび認定基準への適合状況等を勘案し、「エコマークアワード選考委員会」で評価を行い選考
評価ポイント	● エコマークの４つの重点領域「省資源と資源循環」「地球温暖化の防止」「有害物質の制限とコントロール」「生物多様性の保全」のいずれか１つ以上に大きく寄与するもの ● その製品を使用することにより消費者の環境意識の向上、又は環境教育へのつながりが期待されるもの ● 消費者の購買行動を環境に配慮したものへと誘導することが期待されるもの ● 先導的な技術または取り組みであり、他の企業・団体等への波及効果が期待されるもの

GRAND PRIZE
最優秀賞

宝酒造株式会社

容器包装を中心としたごみ問題への取り組み ～商品開発から様々なステークホルダーと連携した取り組みまで～

宝酒造株式会社は、エコマーク認定の超軽量びんをはじめ、アルミ缶、パウチ、紙パックなどあらゆる容器の軽量化を不断に追及。容器包装の3R（リユース・リデュース・リサイクル）に貢献する新たな商品開発にも前向きで、業界をリードする存在であり続けている。また3Rにとどまらず、4つ目のR（リフューズ：発生回避）として、昔ながらの酒類の“量り売り”を全国136店（2018年4月時点）で展開する取り組みは、古き良き時代の慣習をうまく現代に取り込み、それが消費者にも受け入れられているグッドプラクティスである。地域での環境貢献活動にも熱心で、小学生を対象にした環境教育や食育のプログラムは、ゴミの分別やリサイクルの大切さといった身近な環境教育を地道に続けることの大切さに選考委員としても気付かされる。今後も同社の、消費者とともに取り組む環境貢献活動に期待する。

EXCELLENCE PRIZE
優秀賞

東芝テック株式会社

紙をリユースすることで紙の使用量が削減できる複合機「Loops LP35/45/50」の開発・販売

東芝テック株式会社は、紙をリユースすることで紙の使用量が削減できる複合機（Loopsシリーズ）を開発し、2012年にエコマーク認定を取得した。LCAによる環境負荷のデータより、複合機の省エネやリサイクルだけでなく、印刷に使用する紙の使用量削減による環境負荷低減に着目し、「紙をくりかえし使う」という新たなエコライフスタイルを提案した。それを実現するために、インクメーカーとのコラボレーションにより、印刷した内容を消すことができる消せるトナーを開発するなど、技術開発における創意工夫に脱帽させられるとともに、開発スタッフの熱意を讃えたい。また、複合機の利用者向けにエコの「見える化ソリューション」を提供し、機器の操作画面上で紙の使用量削減を促す情報を表示するなど、消費者との環境コミュニケーションを重視したモノづくりも高く評価された。

東洋インキ株式会社／東洋インキグループ

エコマーク商品の継続的販売と持続可能性への貢献の明確化

東洋インキ株式会社は、植物油を用いたインキやリサイクル適性に優れたUV硬化型インキなどの開発を進め、いちはやくエコマーク認定取得に取り組み、現在では33もの製品群で認定を取得している。新たな商品開発にも前向きで、業界をリードする存在であり続けている。印刷インキは新聞、パッケージなど私たちの生活のあらゆる場面で使用されており、エコマーク認定等の環境調和型インキの普及、浸透を図ることで大きな環境負荷低減効果が期待できる。また、持続可能な社会への貢献について分かりやすく紹介するウェブサイト「TOYO INK 1050+」は、デザイナー・クリエイターに向けた環境コミュニケーションという点で独自性があり、その着眼点には学ぶべき点が多い。生物や生態系との共存を目指す経営方針と環境貢献活動も先進的である。

ミサワホーム株式会社

100%リサイクル素材「M-Wood2」を初めとする環境技術開発

ミサワホーム株式会社は、木材や廃プラスチックを原料とする100%リサイクル素材「M-Wood2」でエコマーク認定を取得。資源循環のための拠点整備や回収ルートの確立をすすめ、本業を通じた全社的な資源循環の仕組みを構築するとともに、工場や施工現場のゼロエミッション化をも達成している。住宅メーカーとしてゼロエネルギー住宅を提供することにより、「住まい」という生活のベースで、環境配慮に対する消費者の意識を高めており、選考委員会として、今後も同社の持続可能な社会への貢献に大いに期待を寄せている。また、先駆的な技術開発についても見るべき点が多く、1990年代に早くも100%リサイクル住宅、ゼロエネルギー住宅を実現した技術力の高さと先見性は素晴らしく、工業化住宅における環境技術の発展においても重要な意味を持つものと考える。